

## ルドルフ・フォン・ラバンの 祝祭舞踊文化論について

信州大学医学部 齊藤尚大

ルドルフ・フォン・ラバンが1920年代の著作と演出活動を通じて目指したのは、祝祭舞踊文化の創造である。これは、ラバンが19世紀末から直面していた、感覚器官が衰弱し、造形的生を奪われた身体に、造形的調和感覚を喚起しようとする試みである。

人々、特に労働者の感覚器官を衰弱させ、造形性を喪失させた要因としてラバンは、1. 教会・教育・芸術などの古い諸制度、2. 機械文明の台頭、3. 大都市での体験を挙げる。古い諸制度は硬直した規則しか生み出せず、それゆえ人々の造形的意志の発達は阻害される。また機械文明の台頭は、労働者を機械につなぎとめ、労働の身振りの調和やリズムを破壊する。さらに大都市での群衆の体験、光学的体験に起因するすばやい印象の変化は、瞬時にかつ表層的にそれらを処理することを要請するので、造形的な形態印象は稀にしか完成しないのである。

この状況をラバンは憂うべき事態と捉え、そこからの離脱を試みる。そこで彼が要求するのが、内的祝祭の喚起と、それを可能にする外的組織の整備である。外的組織とは具体的には、自由体操、グループ遊戯あるいは闘争遊戯といった、芸術性を伴った舞踊訓練、さらにはそれを展開する施設である。これらは生活全般を祝祭にし、労働や生活を喜ばしく造形的にするであろうものとして要求された。

この、既成の秩序に非を唱え、内奥の高揚を、闘争的・集団的遊戯において喚起するという彼のヴィジョンは、20年のエッセイ「祝祭における祭祀的教育」などを通じて、自由ドイツ青年に受け入れられた。このエッセイは、自由ドイツ青年に影響力のあったオイゲン・ディーデリヒスの編集する雑誌die Tatに発表されている。そもそも、10年代前半から大戦中にかけてのラバンの活動は、裸体文化や太陽崇拜といったドイツ青年運動と共通する流れにあり、この受容は必然であったのかもしれない。

だが、ラバンの20年代以降の活動は、中世的な祭祀的民族共同体の回帰、身体の内的な統合の、自然で調和のとれた回復といった文脈のみでは捉えきれない。それは、大都市における群衆の身体の解放の文脈とも関連している。

実際ラバンは、彼が否定的に捉えた生活の現実、すなわち資本主義的大都市生活にも運動のリズムを規定するプロセスがあることを認めている。こ

こでラバンは、歴史的アヴァンギャルドと次の使命を共有することになる。すなわち、資本主義的大都市生活に適った知覚や行動のコードを確立することである。例えば、知覚のコードに関して言えば、風刺舞踊劇において、彼は観客に、大都市の猥雑さを嘆きながらも笑い飛ばすという、冷静でありながらも生きた感情を保持する新即物主義的態度をとるよう求めていた。

だが、ラバンの活動にとってより重要なのは、行動、特に身体運動のコードの確立であった。歴史的アヴァンギャルドが、大都市の混沌や、その中で受けるショック体験により解体された機械的身振りを舞台上で表象し、観客に自らの制限された身振りを認識させようとしたのに対し、ラバンはより積極的に、若者や労働者に群衆の中に飛び込ませ、身体運動の法則を修得させようとする。

この装置の一つとして、コーラス舞踊を位置づけることができるであろう。例えば、29年6月23日にマンハイムで行われたフェスティヴァル『日常と祝祭』でのコーラス舞踊に見られる、群の突進とその受け流しの身振りは、「動き続ける生活の調和と法」として重要な事項と理解されていたことが劇評よりわかる。

だが、ラバンの祝祭舞踊文化の総体は、上述の文脈のみでは捉えきれないものであることも確かだ。例えば、コーラス舞踊の空間的・時間的リズムおよびその形態は、単に生活の現実に適った身振りの調和的構成以上の余剰をはらんでいる。また、舞踊家会議や舞踊同盟・舞踊共同体の組織化を通じて、20年代終盤からナチス政権期に向かって政治や社会との接点が増大していく舞踊界の流れも、著作や演出と相関させて考える必要がある。そのためには、群舞の形態形成の機制、さらにはラバンに無意識のうちに植え込まれたオーストリア＝ハンガリー帝国の伝統の回帰といった諸問題に今後踏み込む必要があるだろう。